

氏名	Jesse HOGAN
ヨミガナ	ジェシー ホーガン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第632号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 SURVIVAL AESTHETICS－生き残るための美学と実践 〈作品〉 生き残る美学－‘COLLAPSE STRUCTURE’‘AGAINST ALL LOGIC’ 〈演奏〉

## 論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	保科 豊巳
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造	長谷川 祐子
			研究科）	
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	杉戸 洋
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	篠田 太朗
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	ミヒャエル・シュナイダー
（副査）	森美術館	アシスタント	（熊倉 晴子）	
		キュレーター		
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）
（副査）				（）

## （論文内容の要旨）

生き残るための美学的実践と題する本論文において、芸術の世界における社会的、商業的、学術的そして制度化された活動基盤の中でアーティストが価値を築き、維持し提供できるよう複数のシステムや文脈の中で形成されてきたアートや個々のアーティストの方向性について論じ、現在の芸術実践の状況を考察する。オーストラリアと日本におけるモダンアートやコンテンポラリーアートの近年の歴史に焦点を当て、鍵となるアーティストや作品、プロジェクトに触れながらこの複雑な点を考察する。私自身の最近の作品やプロジェクト、展示会のうち最も重要なものを選択して提示し、批評的な分析を行うことにより、私の直近の活動展開を考察するうえで比較的な文脈を整える。

これらの考察やリサーチを通し、アーティストや作品のつながりや関係を明らかにし、模索する。そうすることにより、アーティストが生き残るために社会的状況だけでなく、他者の影響力や原動力に直接駆り立てられる様子を示したい。アーティストは「現況」を含む制度の方向性や美学の流行、そして批評的にも理論的にも注目されている話題に関する時代思潮に基づいて作品を変更するという点を読者に説得したい。本論文は、そうした行為の基盤が必ずしも創意工夫や、個人的な見解、奔放な独創性だけでなく、アーティストやキュレーターが提案する行為が政治的または社会的に有益であるかに関わらず、不足の事態や、多くの場合は自己的な動機であるという点を論ずる。多くの場合このような変化や戦略は戦術的であり、アーティストが自身の関連性、生存や、国内外関わらず優れた芸術の歴史に名を残すという期待を確実に得るアーティストを対象としている（芸術の社会的および産業的な領域においてアーティストが確実に関連性を得られるようにする）。本論文で指摘する重要な主張点は、アーティストが生き残るうえでの戦略の発展において「メディアムとしての展示」が重要な役割を果たしており、それにはキュレーターと共にまたはキュレーターとしての活動が含まれるということだ。

本論文では次の点を問う。アーティストの役割はどこから始まり、どこで終わるのか？キュレーターの役割はどこから始まり、どこで終わるのか？これは非常に難しい問いで、芸術界におけるアーティストとキュレーターの領域は不明瞭だ。アーティストとキュレーターは区別されるべきではない場合もあり、二者の違いが全く存在すらしない場合すらある。本論文では、キュレーターとしてのアーティストの活動やアーティストとしてのキュレーターの地位を突き詰める。

「レファレンスや複製」、「概念的な防御」といったアーティストの戦略や手法。

例えば、哲学者や歴史家、理論家、批評家やキュレーターの概念を保護として用い、自身の作品やプロジェクト、技術や美学の論理的な判断を正当化することは、組織に属するアーティストが一般的に行う実践の一部にしかすぎない。「概念的な防御」に関しては、アーティストの実践は孤立した状況では生じないという点を証明し突き詰めたい。それはアーティストの自意識や自己生産を形成する一連の遭遇を通して生じるものであり、可能性の源を提供し、アーティストの価値や美学に影響を与える。生き残る美学のコンセプチュアル・アートの最も重要な側面には、オーサーシップの強固な立場を保持すると同時に、交互参照（再盗用）、コラボレーションやオーサーシップの否定を通じたオーサーシップの批評、展開、否定が含まれる。

## 重要なテーマや話題 / CRITICAL THEMES AND TOPICS

コンテンポラリーアーティストは、複数の方策を用いる - そのうちの多くは各人が生み出したものではなく、学習を通して得たもので、組織的に確立された実践である。本論文では、アーティストのプロジェクトの生き残りを保証するためにコンテンポラリーアートを左右する

3つの主要点について論ずる。

### 1. 他の作品との関係（歴史的なレファレンス）

歴史的なレファレンス、オマージュ、概念的な防御を確立する引用の使用

2. 連携ネットワークや社会的なつながりを生み出す作品の能力。例えば、共同的、連携的、再生的可能性（アーティストによるキュレーションの戦略の使用）。アーティストグループ、アーティストが運営するイニシアチブ、コラボレーション、キュレーションの戦略の確立により制作の個性を伸ばすこと

3. 作品の商業的、制度的な価値。商業的で概念的なブランディングの使用による商業的かつ制度的な価値の確立

アーティストは複数の対極的な戦略を用い、コンテンポラリーアートの枠組みの中に自分の作品の関連性を確立する。また、アーティストのアイデンティティの存在と生存は、関連する文脈の中に作品と自分自身を位置付けるアーティストの能力を通して展開される。この点は、プロジェクトの中で前の世代を重ね合わせ複製しながらここ数十年間の間に制作された作品の中で非常に明白である。集約された任意のコラボレーションと見せかけて行われる。重要かつ美学的な懸念・美術界・理論的モデルとアイデアプラットフォームにおける重要性や流行を生み出し維持するためアーティストがアバンギャルドの流行に従うのを見ても、生き残るための美学的実践の動きは明白だ。

芸術活動における「オーサーシップの具体性」は、「生産の集団場」へと衰える。生き残るため、アーティストたちはアイデンティティを手放すと同時に確立しつつ、この場を切り抜ける方法を知っていなければならない。オーサーシップ、匿名性、自律性は矛盾しており、文化生産の中で対照的な役割を果たす。この場を通し、アーティストは自分自身を駆り立て、他者との類似性へと自己投影を行うか、他者と似たような美学や戦略を採用する。アーティストやプロデューサーは、他者との対話、他者のプロジェクトの継続や引き継ぎ、またはオマージュや責任感を通して前の世代や同世代の作品を広げようとする。確立された他者の形式を用いることで、個々の資本を広げる必要のある文化資本を提供する。

本論文では、深い影響を及ぼしつつまだ研究の進んでいない現象を掘り下げる。それは、キュレーターとし

てのアーティストの根本的な役割というまだ執筆されていない歴史である。「展示」と私たちが呼ぶ存在論的に曖昧なものを批評的な媒体として捉え、アーティストはしばしば展示そのものの従来の形式を劇的に再考している。これらの展示を通し、本プロジェクトでは集団的な芸術実践を理解し発展させる。本論文の各章では戦後から現在に至るまで過去を振り返り、未来を見据え、歴史的なプロジェクトやアーティストによるキュレーションの直近のプロジェクト、コラボレーション、そして展示を考察する。

#### （論文審査結果の要旨）

生き残るための美学的実践と題された本論は、アーティストが生き残るための要件を複数の角度から検証、分析したものである。そこには社会的、経済的、商業的、学術的、アートという制度的文脈など、複数の要素が交錯している。

ホーガンはこのサバイバルの出発点をポストメディウム・インスタレーションという状況のはじまりに設定する。メディウムや物質性を逸脱した作品表現は、従来の物質性に依拠した市場の交換価値とは異なった評価、および経済構造を必要とする。これはホーガン自身の制作や生存戦略と密接に結びついており、自身のサバイバル戦略を身近な関心事項や関係者を通して一つ一つ検証するというきわめて主観的な方法論によっている。

ホーガンはまず、オーサiership、作品のオリジナリティ、アイデンティティや自律性という価値観に対する異化作用として、以下の3つの要素をあげる。サバイバビリティという視点で論じられたこれらの要素は、方法論や着想の革新性と、防御という保守性の共存として語られている。

コンセプチュアルアートは、抽象性、概念性を維持しつつ、社会や歴史的な文脈と継続した関係をもつために引用や流用を繰り返す。また共同や連携、マルチプルオーサiershipがうまれる。アーティスト間のコラボだけでなく、キュレーターとの連携も含める。作品の商業的概念的なブランディング、これらを第1章で状況説明したのち、第2章ではリサーチベースあるいはコンセプチュアルアーティストのケーススタディを挙げる。これは河原温、田中功起、オノヨーコ、菅木志雄など多様な角度から「概念芸術家」が選択されている。

3章では自分の作品や実践を分析の対象にし、そこでのインスティテューション批判やプラットフォームの提案、織り込まれるニコラブリオーやクレアビショップの理論にふれつつ、非西洋圏の立場から発言する自分の立ち位置を強調している。それは日本とオーストラリアにあってこの不確かなトランジショナルな状況の中で展示、キュレーションとアーティストの意味の問い直しをしようとする自身への言及である。

作品との関係でこの論文は序章の意味、あるいは、ホーガンの存在領域をフレーミングする役割を果たしているといえる。書き込まれるコンテンツの実体は作品が雄弁に語っている。本論において評価すべきは、ダイアグラムといささか混乱した章立ての組み合わせであり、これは脱構築的な読み取りを可能にする彼のインスタレーションの合わせ鏡でもあり、ホーガンの問いのユニークさの証左となっている。

#### （作品審査結果の要旨）

ジェシー・ホーガンの本作品は博士論文「生き残るための美学と実践」である過去10年間に渡るリサーチに基づき、インタビュー、コラボレーション制作とキュレーション企画、展覧会などを実践して得たまとめとして提示したインスタレーション作品である。作者の制作において基本となっているキーワードはオブジェクト/テーブル/プラットフォーム/床・壁である。美術展示として、またオフィスビルの仕事場、デパートや商店のディスプレイの場として歴史上、また日常生活において当たり前すぎて目にも止まらないわき役として存在するこれらの要素に着目し、美術史的、社会・政治的観点から研究していく論文になって

いる。

本人いわく元々は抽象絵画を描くペインターとして美術を始めたという。キャンバスに描かれた枠内の世界を客観視するために自分の作品を写真に撮りそれをまた描くというドゥープ仕法に変わってゆく。やがて作品の周り囲む環境に視野が広がり、次作から作家仲間の作品展示を自ら写真に撮影して絵画に落とし込んでいく。またさらに視野を広げ美術雑誌やネット上の過去と現在、世界中のインスタレーション画像から関連性を見出すものを選び、写し取って展開していく絵画シリーズ。展開された場における Painting Series 2009-2016 年 (fig60) から見てわかるように本論文での探求はこの頃からすでに始まっている。

本作品は東京藝術大学美術館の展示室内の段差のある天井高と2面異なる材質の壁面のあるデッドスペースになりがちな角地を選び、その空間のプロポーションに合わせ、これまでの研究材料を1500x4500x4500mmの立体フレームの枠の中に圧縮し詰め込んだ大きな箱を想定させることから始まっている。展示空間に合わせ可変的に対応できるフレーム素材を使用。「メデュームとしてのプラットフォーム」を作りあげ。その場が大学空間であることから東京藝大と関係する研究要素を抽出し省略化したものをそのプラットフォームの上に提示する設定になった。これは共有の場を作る装置であり、この立方構造体を解体された状態にして鑑賞者に問いかけている作品である。

また論文にまとめ上げていく上で頭の整理のため、作者は得意とするグラフィックで定期的にダイアグラム化しているが、それら平面化されたグラフィックダイアグラムをインスタレーションと比較しながら立体化したダイアグラムとして見ることも出来る。フレームは軽量鉄骨を使用しており一人で組み立てられるようになっているのだがよく見ると100kgあるガラスが三枚並ぶ。これには吸着ハンドルが7つ運び込んだ状態で、多数の人間で運び込んだ痕跡を残している。これは博士論文を終え「サバイバル」としての最後に加えたさりげないフィニッシングタッチになった。

このインスタレーションは今後の美術界における絵画、彫刻、インスタレーション、また展示空間を司る権威により課せられるルールや制限と展示プラットフォームの構造としての制度的な枠組みの可能性と不可能な点を検証していくプラクティス・ツールになっており、多方面に拡大し変化し続ける現代美術と共に引き続き追求していく価値のある作品であり、全員の審査員が十分に博士課程作品として合格に値すると判断した。

#### (総合審査結果の要旨)

「生き残る美学」と題されたJesse Hoganの博士論文は、先ず、芸術の世界の現代美術の歴史において芸術家として成功することの条件とは何か、芸術家の役割とは何か？キュレーターの役割とは何か？という問いかけがある。

更に作者の動機として、オーストラリア人である本人の芸術家としてのID、本人の継承してきたヨーロッパの芸術の歴史と今学んでいる日本の近代以後の現代美術の歴史について検証する論文でもある。さらに芸術界を成立させている背景を探り芸術とは何か？を問いかける理由となっている。

現在の現代美術の世界において社会的、産業的、学術的、芸術の歴史、芸術批評界、等の芸術界の背景を照射し、リサーチを重ね芸術家の作品とそれらの制度的な文脈との関係を明らかにし芸術家の役割や芸術家の生態学的な分析に踏み込んだ論文となっている。

20世紀の美術館の成立が批評性の場として出発した現代美術の歴史性に触れ、現在では商業的な価値観に市場の理論に絶対服従を強いられている傾向があることを分析した。論文内容中にはオーサーシップの批評についても含まれることも明記されていて決して組織化されないように論文構成によって保護されている。

主なテーマの重要な点として次の3点を挙げている、1、「歴史的なレファレンス」2、「社会との関わり、共生、連携、再生可能性、等」。3、「制度的、経済的な価値の確率」これらの内容を関連づけて論文が構成されていて、美術界の背景と芸術家の成功の裏側、背景を暴き出している。

このように自己の批判を保護にしながら踏み込んで分析した論文は極めて稀であり、独創性に富んだ重要な論文であると高く評価できる。

また新規性を感じる点は美術史の規範に背を向けた文化的、社会的な交流や組織的再編成の必要とするアートプロジェクトにおいては芸術的想像力に依存しているとも論述している。

作品はプロジェクトワーク、個々のオブジェクトコラボレーション、キュレーション、の全てが作品の場所を形成する作品となっている。芸術表現と社会性、歴史。芸術概念定義、批評、場所、等の複合的なインスタレーション作品となっている。

今回の展示では特に美術館の場所や建築的な構造体の展示、サイト、を強調する緊張感のある作品の場を提供している。これは身体性を伴った感覚に訴えることによって概念的に成りがちな作者の作品を現実繋ぎ止めている。

スケール感や「場」としての存在感は成果を上げている秀作である。全員の審査員は作品論文共に博士学位に相応しい作品であることで一致した。